

SS VALUE
バリュー

基礎仕様マニュアル べた基礎

株式会社LIXIL

LIXIL

2018/1/1 初版

もくじ

1. はじめに	… P-1
2. 基礎仕様確定フロー	… P-2
3. 基礎配筋表適用範囲	… P-3
4. 標準基礎仕様	… P-4
(1) ベタ基礎の必要地耐力	
(2) 標準基礎形式	
(3) 高基礎形式	
(4) 人通口補強	
5. ベタ基礎底盤の配筋	… P-7
(1) 配筋検討の必要性	
(2) 配筋の検討	
(3) 配筋表の見方	
(4) 判定例	
6. 基礎梁の開口部（柱間隔）直下の主筋補強	… P-10
(1) 補強検討の必要性	
(2) 補強筋の検討	
(3) 配筋表の見方	
(4) 補強方法	
(5) 判定例	
7. 基礎梁の隅角部の主筋補強	… P-18
(1) 補強検討の必要性	
(2) 補強筋の検討	
(3) 配筋表の見方	
(4) 補強方法	
(5) 判定例	

別添①：配筋表

別添②：SSバリュー基礎検討書

1. はじめに

本マニュアルは、耐震補償付き[SSバリュー]の要件である耐震等級3の基礎仕様を設計するためのものです。

(財)日本住宅木造技術センター発行の『2015年版 木造住宅のための住宅性能表示制度』に準じ、配筋表を作成し設計に活用しています。

配筋表は、あらかじめ所要の許容応力度計算による構造計算等を行ったうえで「早見表」の形式に整理しています。

以下に本マニュアル作成に際しての準拠資料を示します。

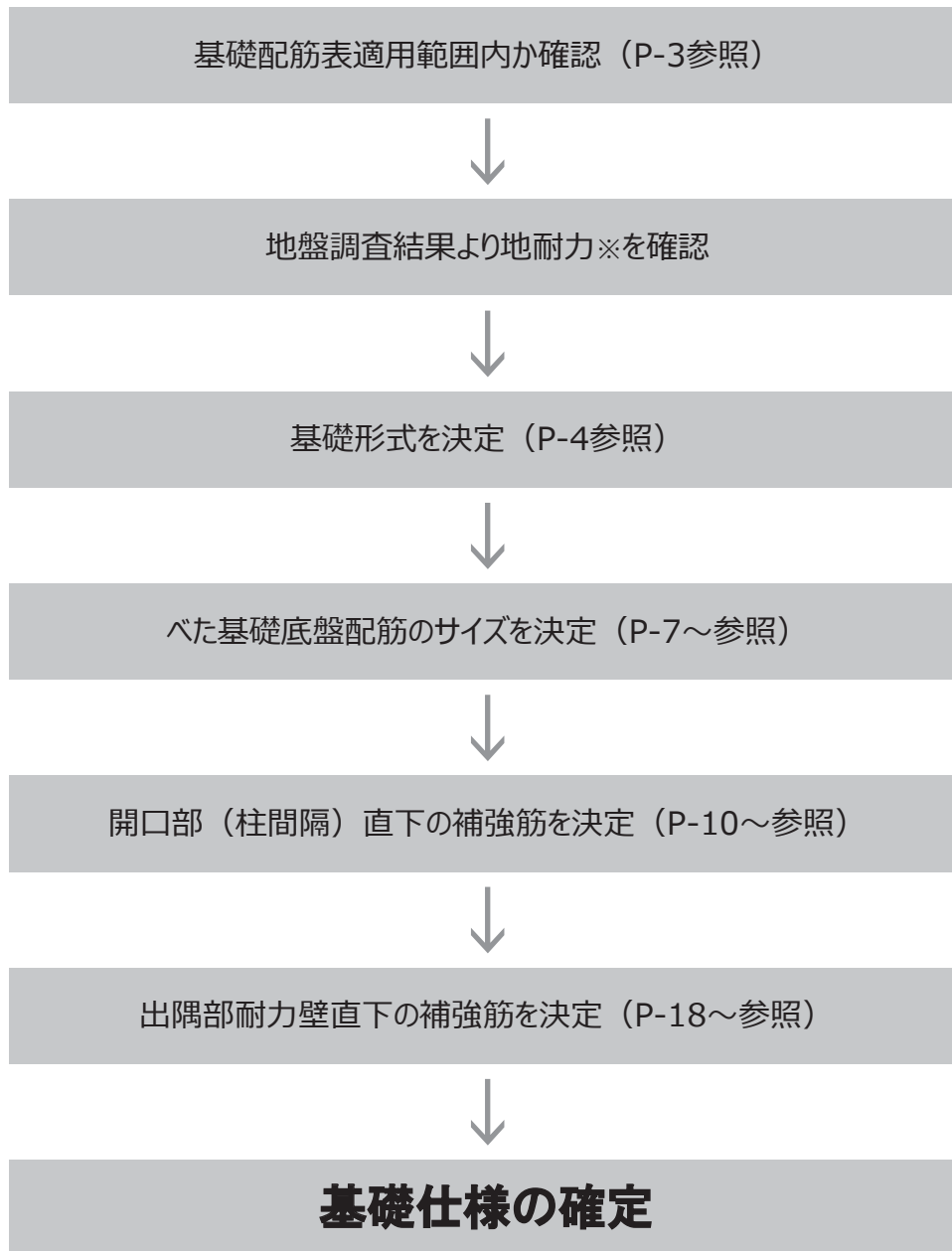
- | | | | |
|----|----------------------------|-------|-------------------|
| 主) | 小規模建築物基礎設計指針 | …………… | (社)日本建築学会 |
| 主) | 小規模建築物基礎設計例集 | …………… | (社)日本建築学会 |
| 主) | 2015年版 建築物の構造関係技術基準解説書 | …………… | 国土交通省、(財)日本建築センター |
| 主) | 2015年版 木造住宅のための住宅性能表示制度 | …………… | (財)日本住宅木材技術センター |
| 副) | 鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説2010 | …………… | (社)日本建築学会 |
| 副) | 住宅基礎の構造設計演習帳 | …………… | (財)日本建築センター |
| 副) | 木造軸組工法住宅の横架材及び基礎のスパン表[増補版] | …… | (財)日本住宅木材技術センター |
| 副) | 木造住宅軸組工法住宅の許容応力度設計(2017年版) | …………… | (財)日本住宅木材技術センター |

本マニュアルにおいては、建築基準法及び、(社)日本建築学会発行の小規模建築物基礎設計指針、小規模建築物基礎設計例集の構造計算内容に準じて作成します。

主)の基準に記載のない計算方法については、副)の基準に準拠します。

2. 基礎仕様確定フロー

下記フローの手順で、基礎仕様を決定します。



※ 建築基準法の「地盤の許容応力度」、日本建築学会発行文献の「地盤の許容支持力度」に該当します。本マニュアルでは一律「地耐力」と表記します。

3. 基礎配筋表適用範囲

項目	内容
対象	◇ 建築基準法第6条第1項第四号に該当する2階建てまたは平屋の木造軸組み工法住宅
階数	◇ 2階建て以下
延べ面積	◇ 500㎡以下
高さ	◇ 13m以下
軒の高さ	◇ 9m以下
基準寸法	◇ 900mm以上1000mm以下 尺モジュール配筋表：900mm以上910mm以下 メーターモジュール配筋表：910mm超え1000mm以下
積雪荷重	◇ 一般地域、多雪地域（1m以上2m以下）
基礎種別	◇ ベタ基礎
材料	◇ コンクリート $F_c \geq 18\text{N/mm}^2$ 設計基準強度
	◇ 鉄筋 SD295A（D10、D13、D16）
仕上げ概要	◇ 屋根 軽い屋根：スレート葺き 重い屋根：瓦
	◇ 天井 石膏ボード
	◇ 床 畳またはフローリング
	◇ 外壁 サイディング、ラスモルタル、またはALC
	◇ 内壁 石膏ボード
小屋裏収納	◇ 下階の床面積の1/2未満

4. 標準基礎仕様

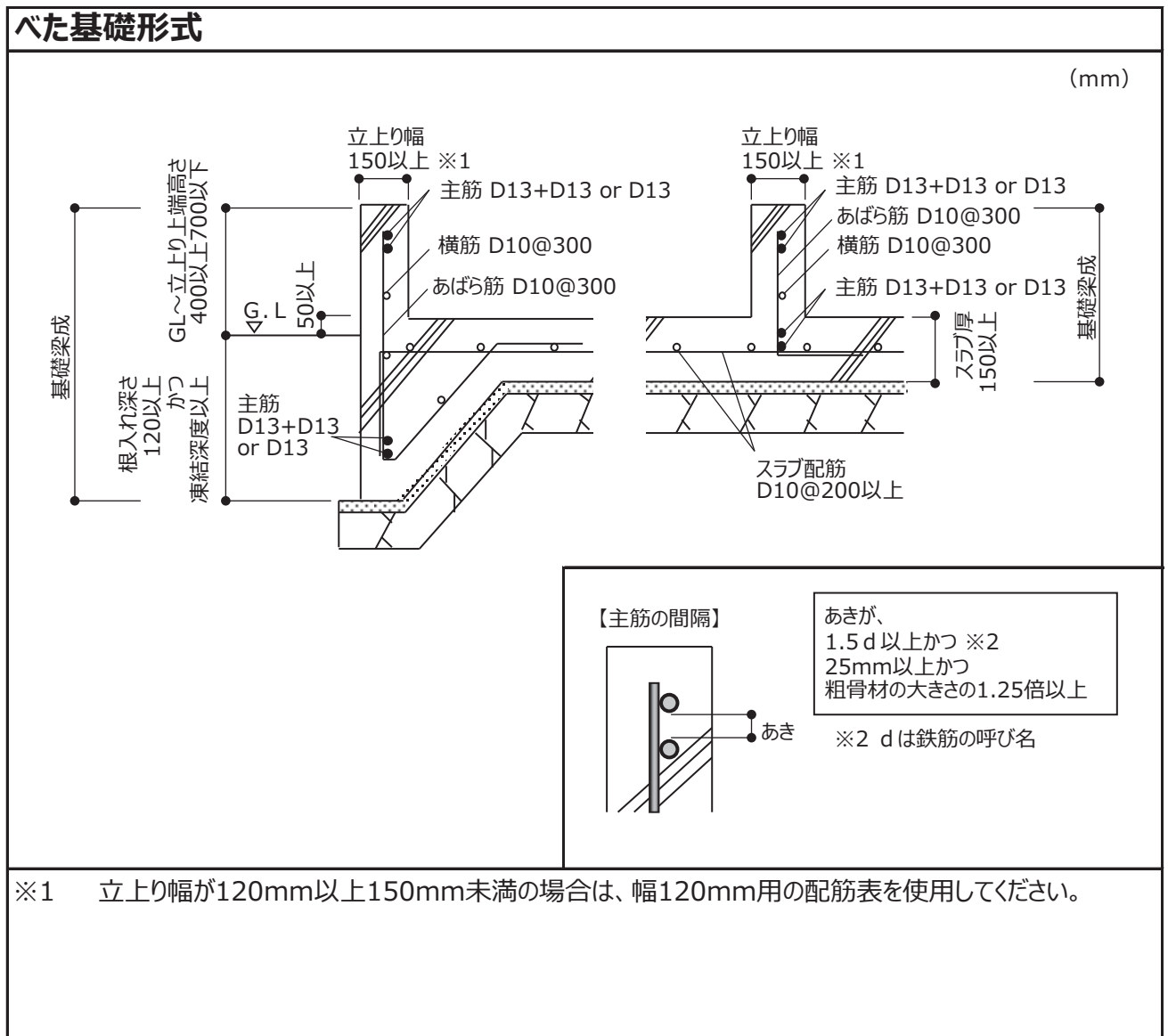
(1) ベタ基礎の必要地耐力

地盤調査結果より地耐力が20kN/m²以上であることを確認してください。

※地耐力が上記地耐力を満たさない場合、地盤調査会社からの地盤改良等の指示に従い上記地耐力以上となるようにしてください。

(2) 標準基礎形式

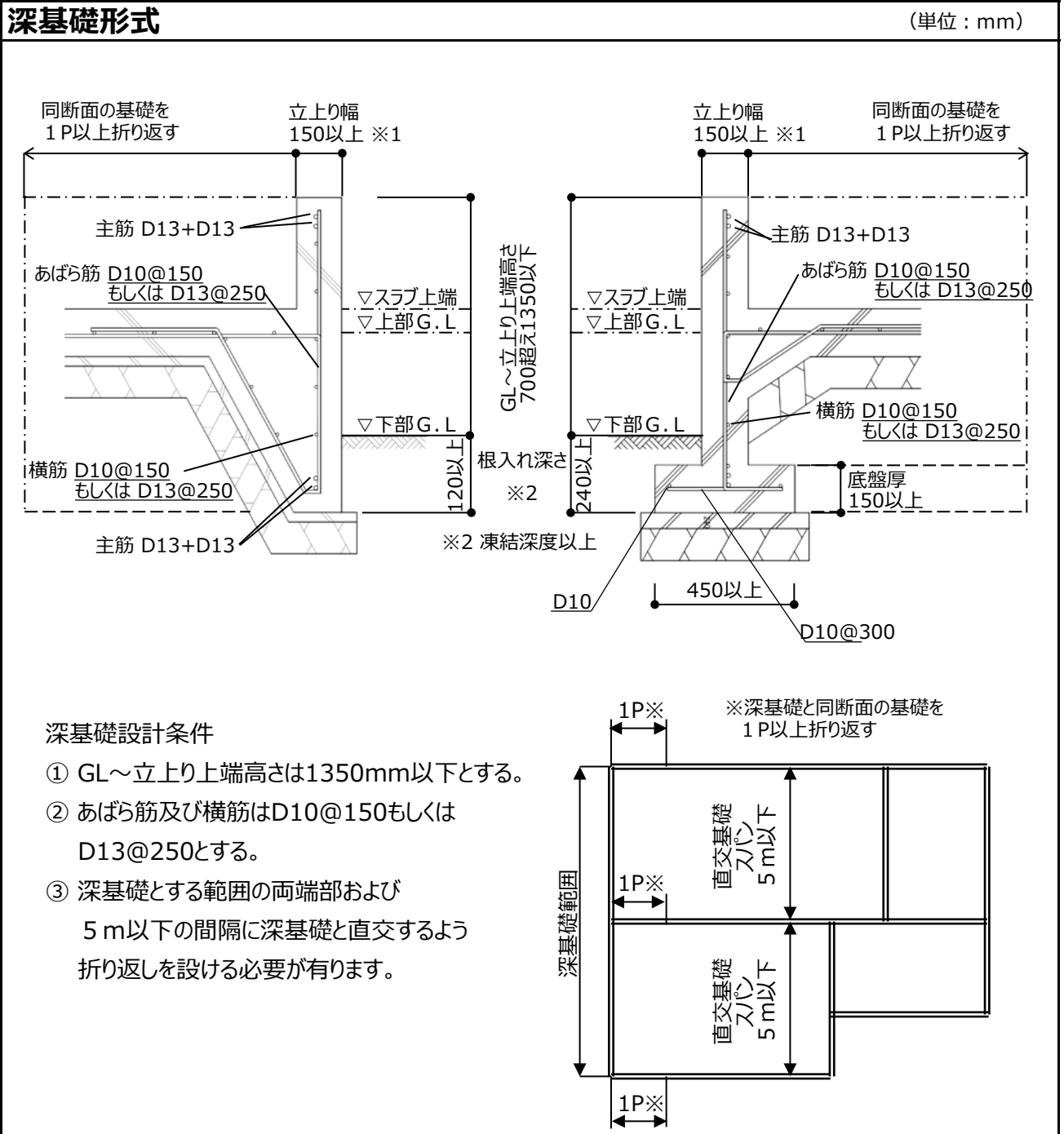
ベタ基礎の標準形式を下図に示します。



(3) 深基礎形式

深基礎の標準基礎形式を下図に示します。

下図の立上り高さを超える深基礎は別途土圧に対して、許容応力度計算による構造計算が必要となります。



注意

上図の立上り高さ以下の場合でも、確認申請時には構造計算が必要な場合があります。

※1立上り幅が120mm以上150mm未満の場合もSS構造体バリューにすることが出来ますが、上記深基礎形式は適用出来ません。深基礎部分は立上り幅 150mm以上としてください。

(4) 人通口補強

人通口のひび割れ防止のため補強筋（斜筋）：D10 を下記要領で配置してください。

スラブ区画上に開口を設ける場合は、必ず下記の仕様とする必要があります。

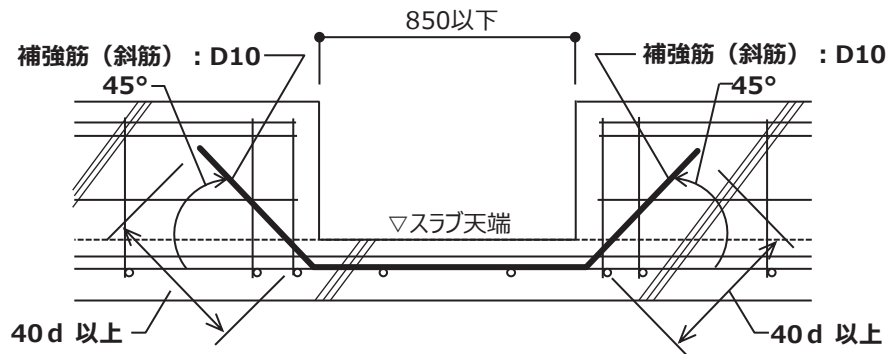
※ 接地厚を負担する基礎梁に設ける人通口については、別途曲げ補強筋が必要になります。

補強要領については、配筋表P-5参照

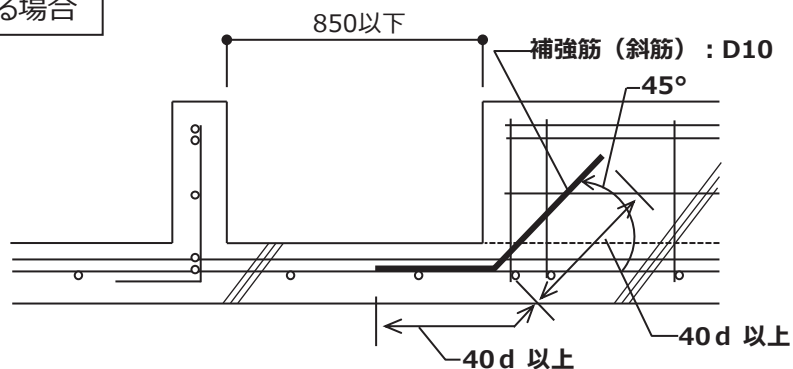
人通口周りの補強筋（斜筋）配置方法

※ d は鉄筋の呼び名
(mm)

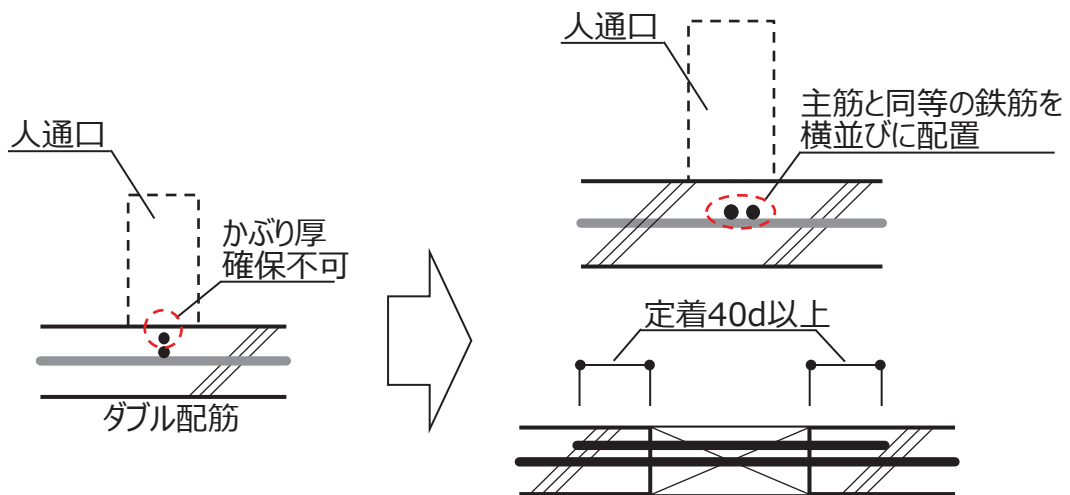
通常部



基礎梁端部に設ける場合



ダブル配筋時に上側のコンクリートのかぶり厚が確保できない場合



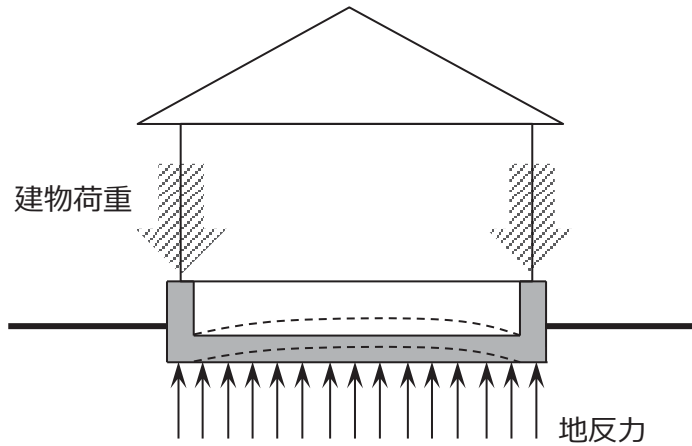
5. べた基礎底盤の配筋

(1) 配筋検討の必要性

べた基礎は、基礎自重を含む建物全体の荷重を底盤全体で支えます。

このとき、底盤には地反力が生じ、地反力によって押し上げられることから、底盤は凸状に変形しようとしています。

この力に抵抗するために必要な配筋を検討する必要があります。



(2) 配筋の検討

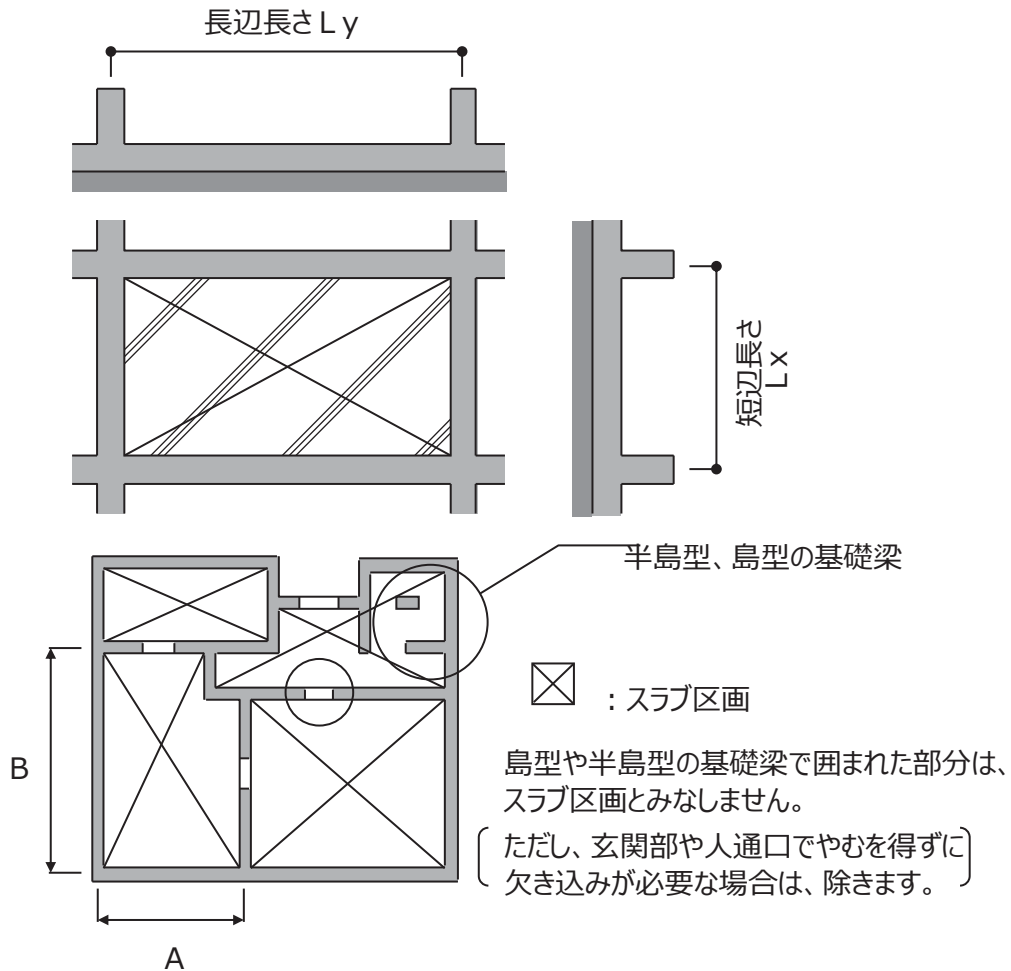
べた基礎の底盤は、厚さ150mm以上の鉄筋コンクリート造としてください。

底盤の配筋は、スラブ区画毎に「配筋表：スラブ配筋」に準じ
シングル配筋、長辺・短辺同配筋とします。

(3) 配筋表の見方

(3) -1スラブ区画（短辺、長辺）の見方

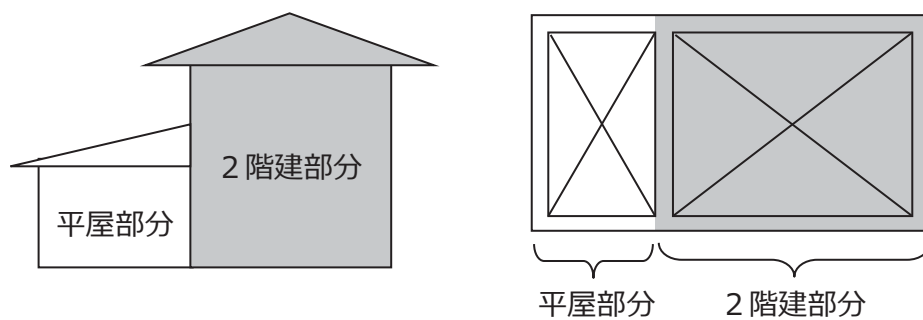
スラブ区画は、連続する基礎梁（立上り）に囲まれた部分とします。



※ スラブ区画が多角形の場合の辺の長さは、その区画の最外周線で囲まれた矩形の辺の長さとしてします。
 （上図の左下の区画の場合、短辺はA、長辺はBとなります。）

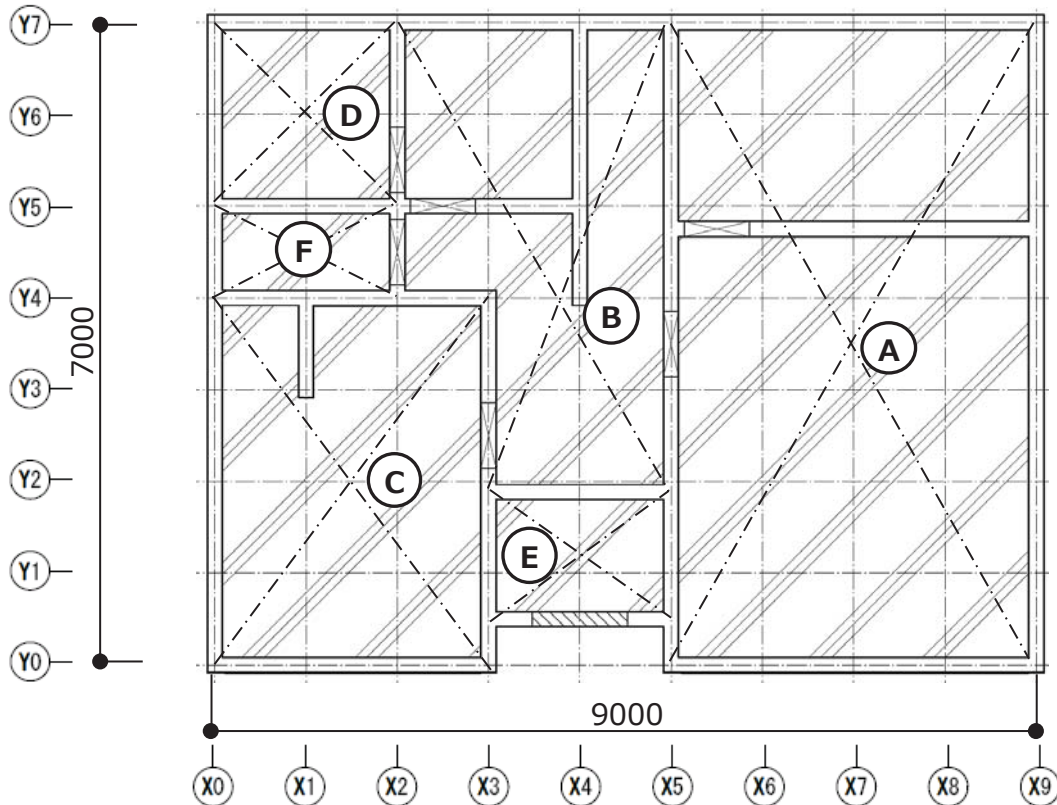
(3) -2 下屋付き2階建の場合の区画の考え方

平屋部分のスラブ区画は、「平屋建て」の配筋表になります。



(4) 判定例

【条件】屋根材：軽い屋根、地域：一般地域、階数：2階建て



上記プランの中での最大スラブ区画は、Aスラブ区画となります。

Aスラブ区画 短辺：4 m 長辺：7 m

スラブ配筋表より、D13@150 になります。

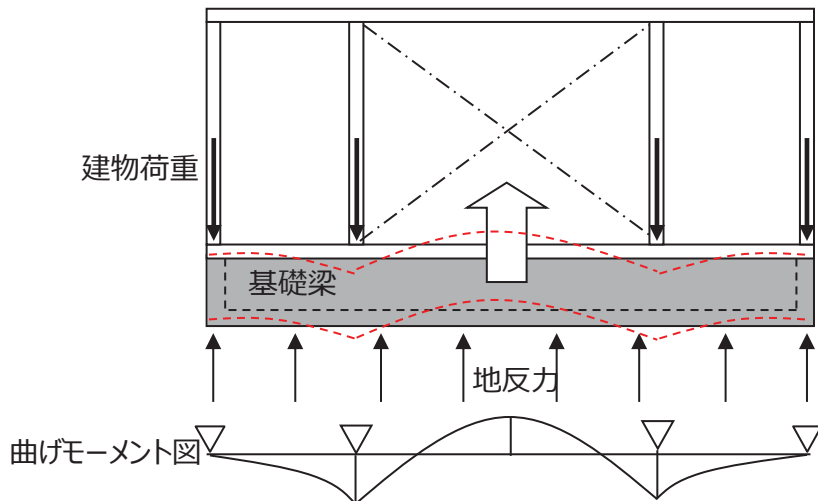
この配筋で、他の区画も配筋すれば、簡単にスラブ配筋を決めることもできます。

配筋表：スラブ配筋			メーターモジュール			
【一般地域 軽い屋根 スラブ厚150mm】			《補強筋凡例》 ①：D10@200 ②：D10@150 ③：D13@200 ④：D13@150 ⑤：D13@100			
積層区分	階数	短辺長さ Lx (m)	短辺に対する長辺長さLy (m)			
			Ly ≤ Lx	Ly ≤ 1.5Lx	Ly ≤ 2Lx	Ly > 2Lx
一般地域	平屋建て	2 (m) 以下	①	①	①	①
		2.5 (m) 以下	①	①	①	①
		3 (m) 以下	①	①	①	①
		3.5 (m) 以下	①	①	①	①
		4 (m) 以下	①	①	②	②
		4.5 (m) 以下	①	②	③	③
	2階建て	2 (m) 以下	①	①	①	①
		2.5 (m) 以下	①	①	①	①
		3 (m) 以下	①	①	②	②
		3.5 (m) 以下	①	②	③	③
		4 (m) 以下	①	③	④	④
		4.5 (m) 以下	②	④	④	⑤
		5 (m) 以下	③	⑤	⑤	⑤

6. 基礎梁の開口部（柱間隔）直下の主筋補強

(1) 補強検討の必要性

鉛直荷重により底盤で受けた地反力が基礎梁に伝わることで、開口部直下にも地反力が掛かり、開口中央部に基礎梁を押し上げる力が働きます。この力に抵抗するために必要な基礎梁の主筋補強検討の必要があります。また、開口の無い壁であっても、開口部と同様に補強筋の検討を行います。

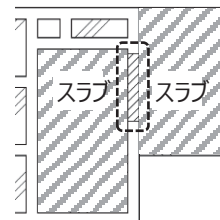


(2) 補強筋の検討

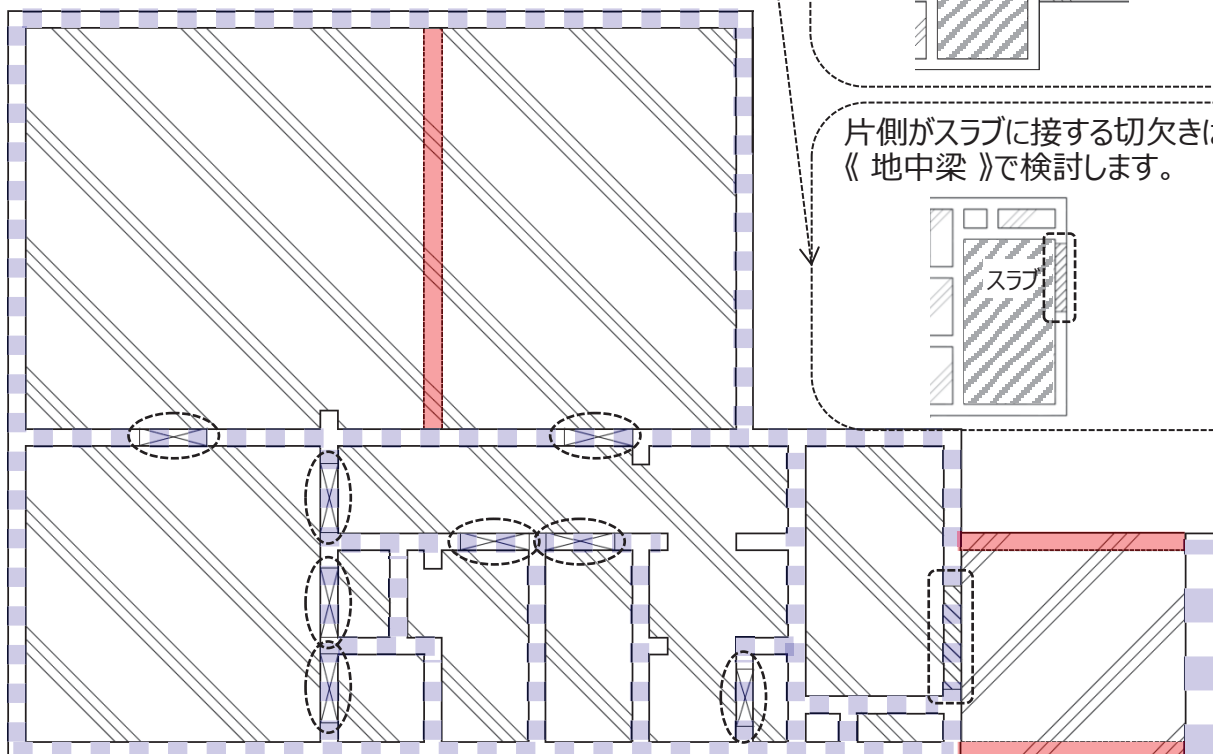
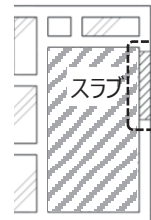
開口部（柱間隔）は「配筋表：開口部（柱間隔）の補強筋」に準じて主筋を決定してください。下記部位の補強検討が必要です。部位に応じた配筋表より適切な検討をしてください。

- ■ ■ ■ ■ 基礎立上り … 《 標準基礎 》
- ■ ■ ■ ■ 地中梁 … 《 地中梁 》
- ○ ○ ○ ○ 人通口 … 《 人通口 》
- □ □ □ □ 切欠き … 《 人通口 》 or 《 地中梁 》

両側がスラブに接する切欠きは《 人通口 》で検討します。



片側がスラブに接する切欠きは《 地中梁 》で検討します。

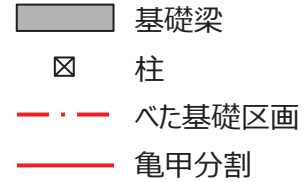
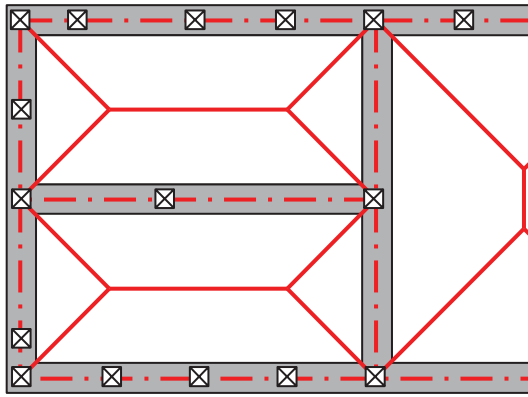


(3) 配筋表の見方

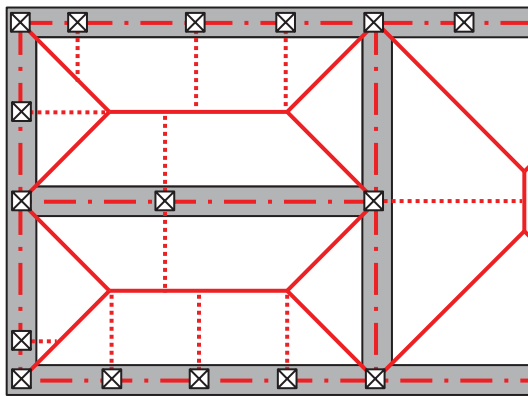
(3) -1 負担面積の算出方法

下記方法にて柱間ごとの負担面積を算出します。

い) ベた基礎区画をそれぞれ亀甲分割します。

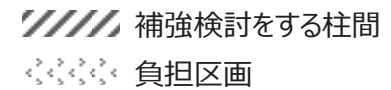
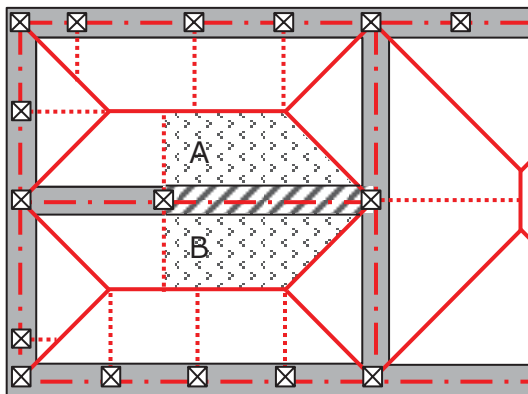


ろ) 亀甲分割した区画を柱間ごとに区画分割します。



は) 柱間に接する区画を負担区画とします。

例) 斜線部の基礎梁の負担区画は A+B となります。



に) 負担区画の面積に安全率係数：1.34 を乗じた面積を負担面積とします。

※安全率係数：1.34は『木造軸組工法住宅の許容応力度設計』P168の「三角形分布の基礎梁については、中央部モーメントを等分布荷重の4/3倍」より採用しています。(4/3≒1.34)

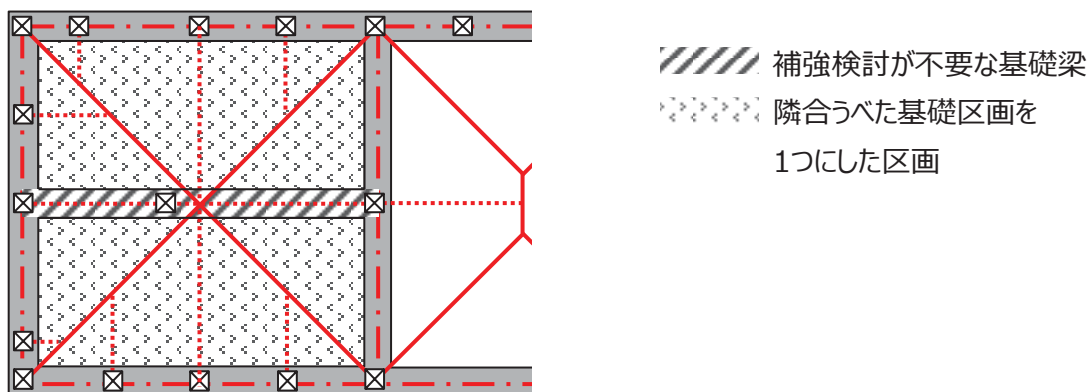
ほ) 補足

ほ-1) ベた基礎区画について

基本的に基礎梁で囲われた区画をべた基礎区画としますが、隣り合うべた基礎区画を1つのべた基礎区画として検討を実施することも可能です。

その場合、斜線部の基礎梁の開口部（柱間隔）直下の主筋補強の検討は不要となります。

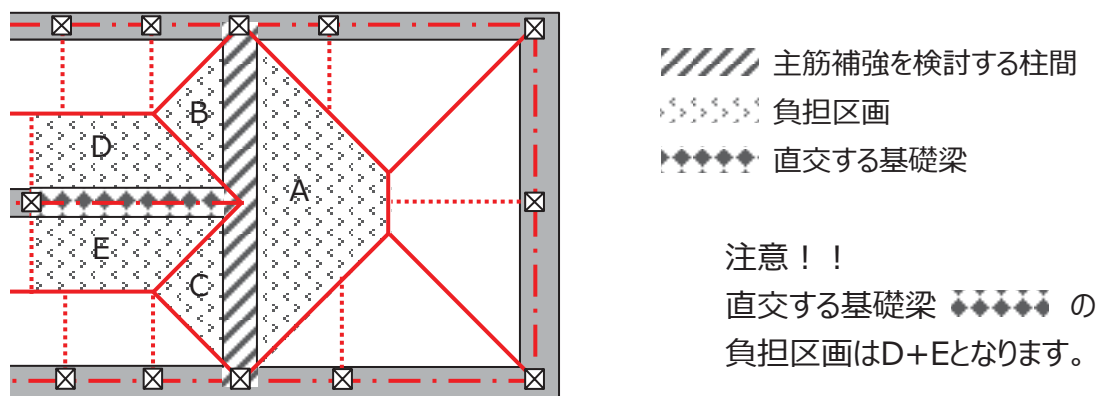
べた基礎底盤の配筋検討は1つにしたべた基礎区画で行います。



ほ-2) 主筋補強を検討する柱間の間に他のべた基礎区画の基礎梁が直交する場合の負担区画の求め方

直交する基礎梁の負担区画の面積の1/2を加算します。

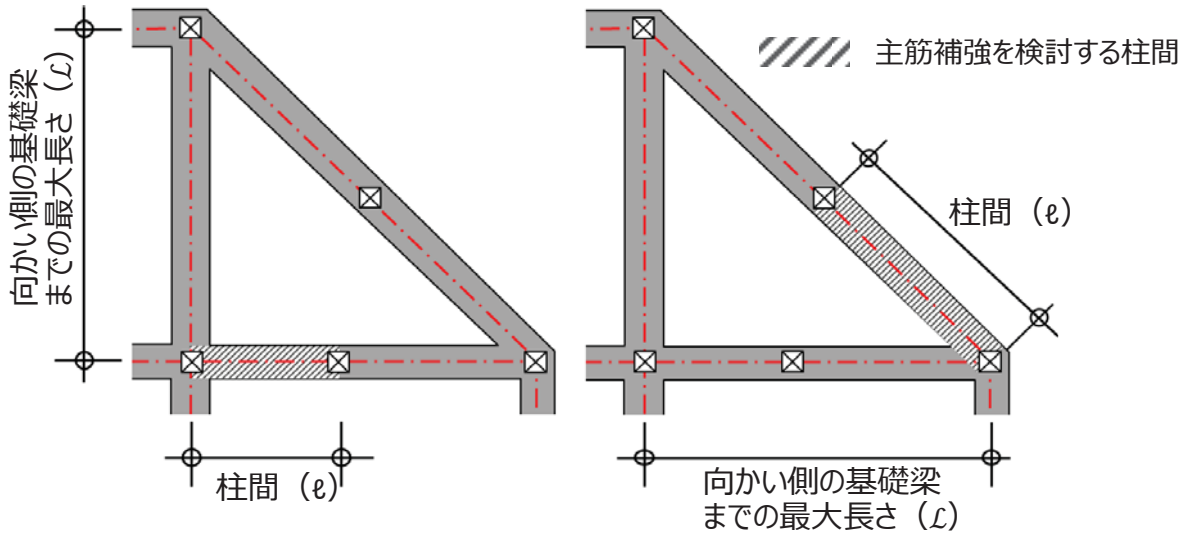
例) 斜線部の基礎梁の負担区画は $A+B+C+(D+E)/2$ となります。



ほ-3) 斜め基礎梁を含むべた基礎区画について

主筋補強を検討する柱間の向かい側の基礎梁までの最大距離 (L) に
 検討する柱間長さ (ℓ) を乗じて求めた面積の1/2を負担面積とします。

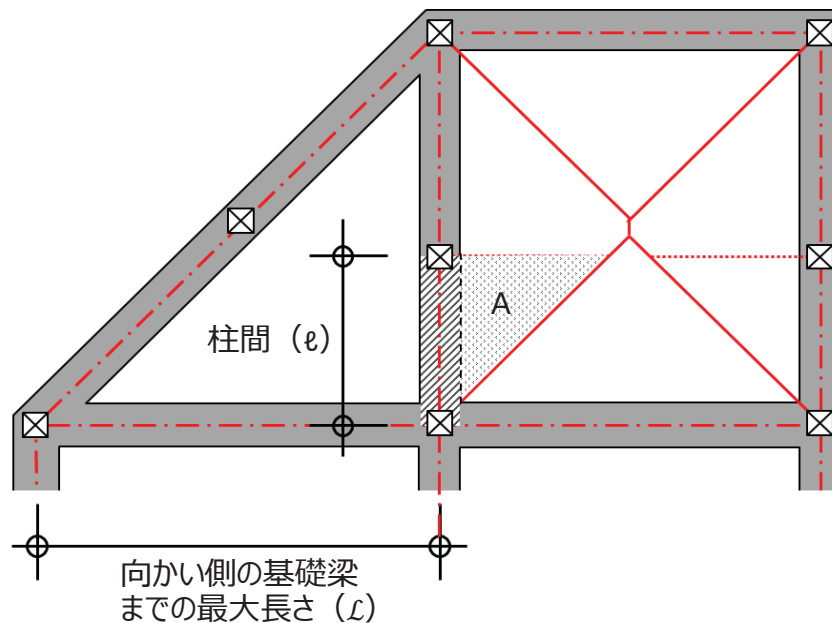
※ 本検討方法では負担面積の重複が発生し過剰となりますが、斜め基礎梁を含むべた基礎
 区画に対して亀甲分割の方法が明確でないため、安全側に本検討方法を採用します。
 そのため本検討方法で算出した負担面積に安全率係数：1.34 は乗じません。



【計算例】

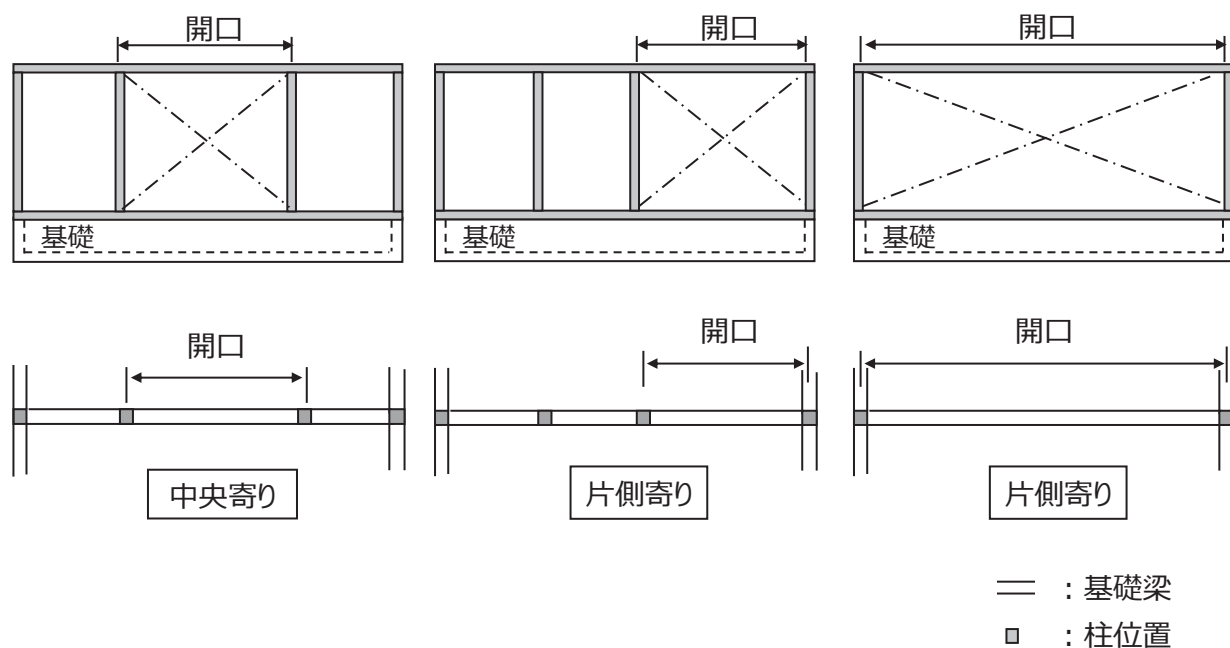
主筋補強を検討する柱間

負担面積： $(\ell \times L \times 1/2) + (A \times 1.34)$



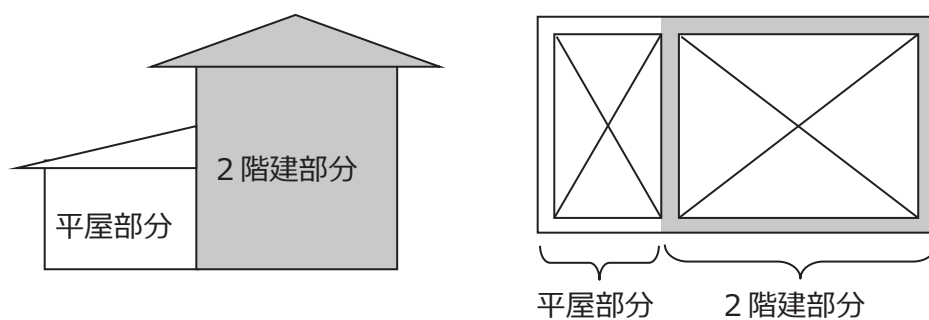
(3) -2 「中央寄り」「片側寄り」の判定方法

基礎梁間の中央付近に、開口部が位置する場合は「中央寄り」を、それ以外の位置の場合は、「片側寄り」を選択してください。



(3) -3 下屋付き2階建の場合の区画の考え方

平屋部分のスラブ区画は、「平屋建て」の配筋表になります。



(4) 補強方法

(4) -1 標準主筋外

配筋表の補強筋が標準主筋を超える補強筋が必要となった場合は、配筋表の補強筋に従い補強をしてください。（補強方法は別添①：配筋表 P-8～21 参照）

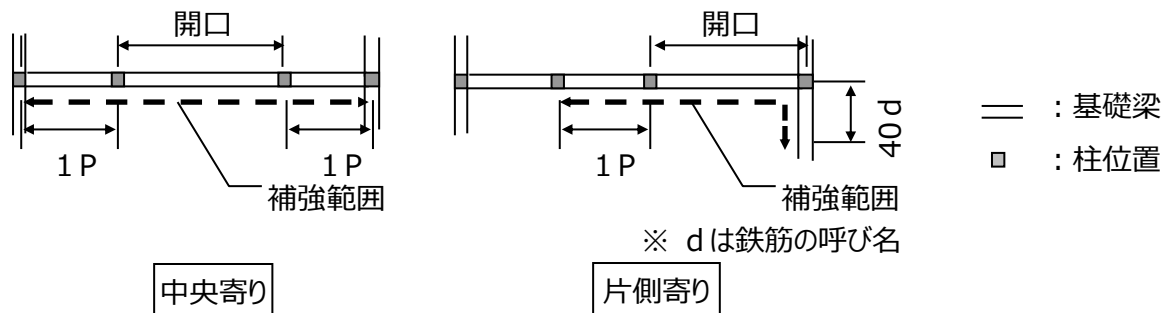
下記は《 標準基礎 》の補強方法になります。

例 1) 標準主筋：D13+D13、配筋表補強筋：D13+D16

上下主筋をD13+D13⇒ D13+D16に変更。

例 2) 標準主筋：D13、配筋表補強筋：D16+D16

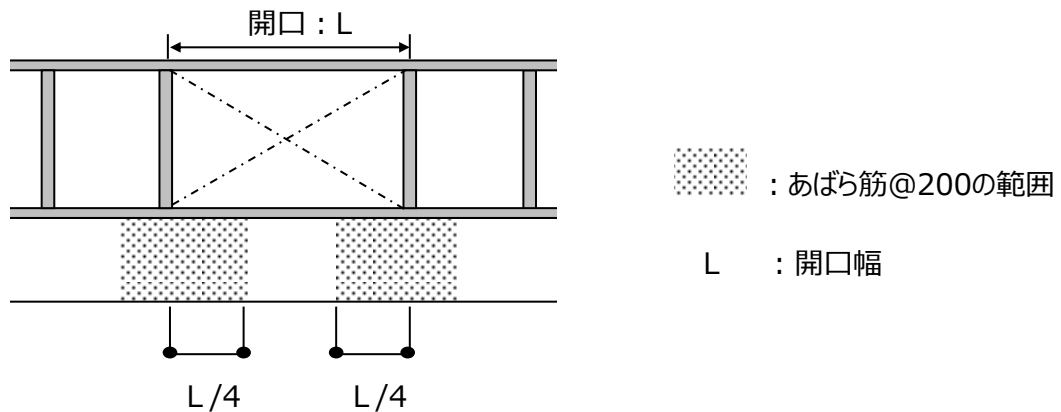
上下主筋をD13⇒ D16+D16に変更。



(4) -2 あばら筋の補強方法

「D 1 3 *」の様「*」印がある場合は、あばら筋間隔を 200mm以内 にしてください。

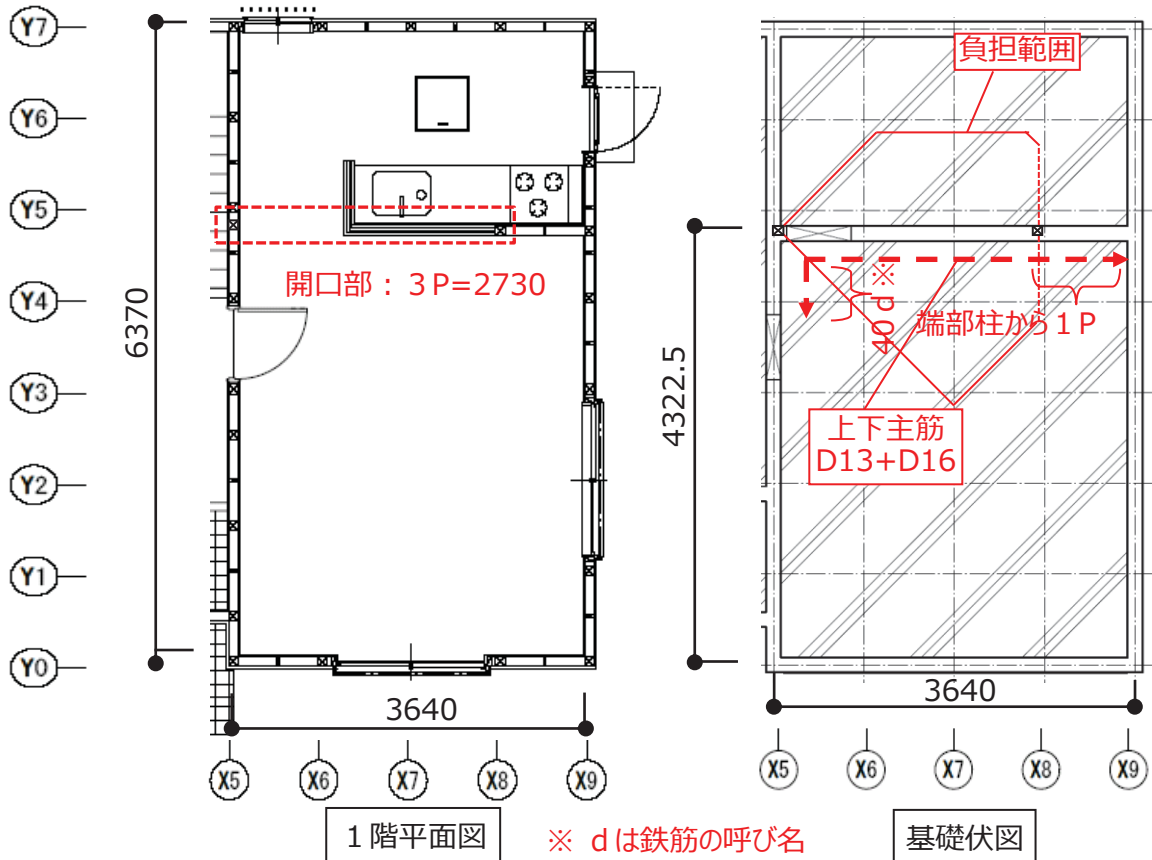
（ 端部柱直下から 開口：L/4 の範囲内を @200 とする ）



(5) 判定例

(5) -1 判定例

【条件】べた基礎、地域：一般地域、屋根種類：重い屋根、階数：2階建て、基礎梁成500



上記開口部の場合、負担面積 6.93m^2 ($5.17\text{m} \times 1.34$)、柱間隔は3P片側寄りになるので、配筋表よりD13+D16となります。

配筋表：開口部（柱間隔）直下の補強筋《通常基礎》

【一般地域 重い屋根 基礎幅150mm】

尺モジュール

《補強筋凡例》 ①：D13 ②：D13+D10 ③：2-D13 ④：D13+D16 ⑤：2-D16

*印がついている場合：あばら筋を@200に変更 ※黒塗りつぶし箇所は配筋の適用範囲外です。

基礎梁成 (mm)	階数	負担面積 (m)	柱間隔 (m) と開口部位置													
			0 < 柱間隔 ≤ 0.91		0.91 < 柱間隔 ≤ 1.82		1.82 < 柱間隔 ≤ 2.73		2.73 < 柱間隔 ≤ 3.64		3.64 < 柱間隔 ≤ 4.55		4.55 < 柱間隔 ≤ 5.46		5.46 < 柱間隔 ≤ 6.37	
			中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り
500 以上	2階建て	1	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
		1.5	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②
		2	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②
		2.5	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②	②	③
		3	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②	②	③	②	④
		3.5	①	①	①	①	①	②	①	②	②	③	②	④	③	④
		4	①	①	①	①	①	②	②	③	②	③	③	④	③	⑤
		4.5	①	①	①	①	①	②	②	③	②	④	③	⑤	④	
		5	①	①	①	①	①	②	②	③	③	④	③		④	
		5.5	①	①	①	②	②	③	②	④	③	⑤	④		④	
		6	①	①	①	②	②	③	③	④	③		④		⑤	
		6.5	①	①	①	②	②	③	③	④	④		④			
		7	①	①	①	②	②	③	③	④	⑤	④	⑤			
		7.5	①	①	①	②	②	③	③	④	④		④			
		8	①	①	②	③	③	④	④	⑤						
		8.5	①	* ①	* ②	* ③	* ③	* ④	* ④	* ⑤						
		9	①	* ①	* ②	* ③	* ③	* ④	* ⑤							
9.5	①	* ①	* ②	* ③	* ③	* ④	* ⑤									
10	①	* ①	* ②	* ③	* ③		⑤									
11	①	* ②	* ③	* ④	* ④											
12	①	* ②	* ③	* ④	* ④											
13	①	* ②	* ③	* ④	* ④											
14	①	* ②	* ③	* ⑤	* ⑤											
15	①	* ②	* ③													
16	②	* ③	* ④													

(5) -2 補足

標準基礎・地中梁の検討において、標準基礎梁成では補強筋が適用範囲外になることがあります。その場合は基礎梁成を上げて補強筋の検討を行います。

配筋表：開口部（柱間隔）直下の補強筋 《 標準基礎 》
 【 一般地域 重い屋根 基礎幅150mm 】

尺モジュール

*印がついている場合：あばら筋を@200に変更が必要です。
 《 補強筋凡例 》 ①：D13 ②：D13+D10 ③：2-D13 ④：D13+D16 ⑤：2-D16

※標準主筋が2-D13の場合、配筋表の①：D13、②：D13+D10は③：2-D13で置き換えてください。※黒塗りつぶし箇所は配筋の適用範囲外です。

基礎梁成 (mm)	階数	柱間隔 (m) と開口部位置	柱間隔 (m) と開口部位置												
			0.91 < 柱間隔 ≤ 1.82		1.82 < 柱間隔 ≤ 2.73		2.73 < 柱間隔 ≤ 3.64		3.64 < 柱間隔 ≤ 4.55		4.55 < 柱間隔 ≤ 5.46		5.46 < 柱間隔 ≤ 6.37		
			中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	
500以上	1	標準基礎梁成	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
	1.5	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②
	2	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②
	2.5	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②	②	②	③
	3	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②	②	③	②	④
	3.5	①	①	①	①	①	②	①	②	②	③	②	④	③	④
	4	①	①	①	①	①	②	②	③	②	③	③	④	③	⑤
	4.5	①	①	①	①	①	②	②	③	②	④	③	⑤	④	
	5	①	①	①	①	①	②	②	③	③	④	③		④	
	5.5	①	①	①	②	②	③	②	④	③	⑤	④		④	
	6	①	①	①	②	②	③	③	④	③	④			⑤	
	6.5	①	①	①	②	②	③	③	④	④					
	7	①	①	①	②	②	④	③	⑤	④					
	7.5	①	①	①	②	②	④	③	⑤	④					
	8	①	①	②	③	③	④	④	⑤	⑤					
	8.5	①	*	①	*	②	*	③	*	④	*	④	*		
	9	①	*	①	*	②	*	③	*	③	*	⑤	*	④	*
	9.5	①	*	①	*	②	*	③	*	③	*	⑤	*	④	*
10	①	*	①	*	②	*	③	*	③	*					
11	①	*	②	*	②	*	④	*	④	*					
12	①	*	②	*	③	*	④	*	④	*					
13	①	*	②	*	③	*	④	*	④	*					
14	①	*	②	*	③	*	⑤	*	⑤	*					
15	①	*	②	*	③	*									
16	②	*	③	*	④	*									
17	②	*	③	*	④	*									
18	②	*	③	*	④	*									

基礎梁成以外を同条件で補強筋が引きあたるまで基礎梁成を大きくします。

配筋表：開口部（柱間隔）直下の補強筋 《 標準基礎 》
 【 一般地域 重い屋根 基礎幅150mm 】

尺モジュール

*印がついている場合：あばら筋を@200に変更が必要です。
 《 補強筋凡例 》 ①：D13 ②：D13+D10 ③：2-D13 ④：D13+D16 ⑤：2-D16

※標準主筋が2-D13の場合、配筋表の①：D13、②：D13+D10は③：2-D13で置き換えてください。※黒塗りつぶし箇所は配筋の適用範囲外です。

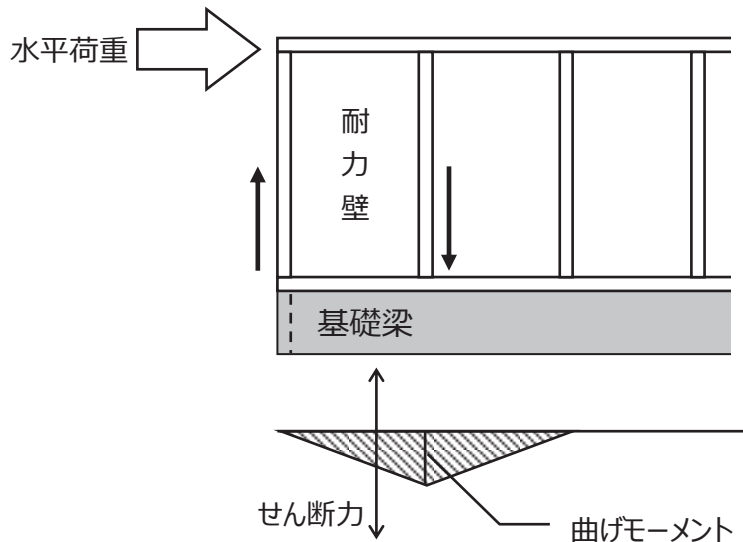
基礎梁成 (mm)	階数	柱間隔 (m) と開口部位置	柱間隔 (m) と開口部位置												
			2 < 柱間隔 ≤ 2.73		2.73 < 柱間隔 ≤ 3.64		3.64 < 柱間隔 ≤ 4.55		4.55 < 柱間隔 ≤ 5.46		5.46 < 柱間隔 ≤ 6.37				
			中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り	中央寄り	片側寄り			
550以上	1	補強筋が引きあたる基礎梁成	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
	1.5	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
	2	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②
	2.5	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②	②	③
	3	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②	③	②	③
	3.5	①	①	①	①	①	①	①	②	②	②	②	③	②	④
	4	①	①	①	①	①	②	①	②	②	③	②	④	③	④
	4.5	①	①	①	①	①	②	②	③	②	③	③	④	③	⑤
	5	①	①	①	①	①	②	②	③	②	④	③	⑤	④	⑤
	5.5	①	①	①	①	①	②	②	③	③	④	③	⑤	④	
	6	①	①	①	②	②	③	②	④	③	⑤	④		④	
	6.5	①	①	①	②	②	③	②	④	④				⑤	
	7	①	①	①	②	②	③	③	④	④				⑤	
	7.5	①	①	①	②	②	③	③	④	④				⑤	
	8	①	①	①	②	②	④	③	⑤	④			⑤		
	8.5	①	①	①	②	②	④	③	⑤	④			⑤		
	9	①	①	②	③	③	④	④	⑤	⑤					
	9.5	①	*	①	*	②	*	③	*	③	*	⑤	*	④	*
10	①	*	①	*	②	*	③	*	③	*	⑤	*	④	*	
11	①	*	①	*	②	*	③	*	③	*	⑤	*	④	*	
12	①	*	②	*	②	*	④	*	④	*	⑤	*			
13	①	*	②	*	②	*	④	*	④	*	⑤	*			
14	①	*	②	*	③	*	④	*	④	*					
15	①	*	②	*	③	*	⑤	*	⑤	*					
16	①	*	②	*	③	*	⑤	*	⑤	*					
17	①	*	②	*	③	*	⑤	*	⑤	*					
18	②	*	③	*	④	*									

7. 基礎梁の隅角部の主筋補強

(1) 基礎梁の隅角部の主筋補強検討の必要性

地震等の水平荷重作用時に、隅角部の耐力壁に転倒モーメントが生じ、基礎梁に浮き上がり・押さえ込みの力が生じます。

この力に対抗するために主筋補強検討の必要があります。



(2) 補強筋の検討

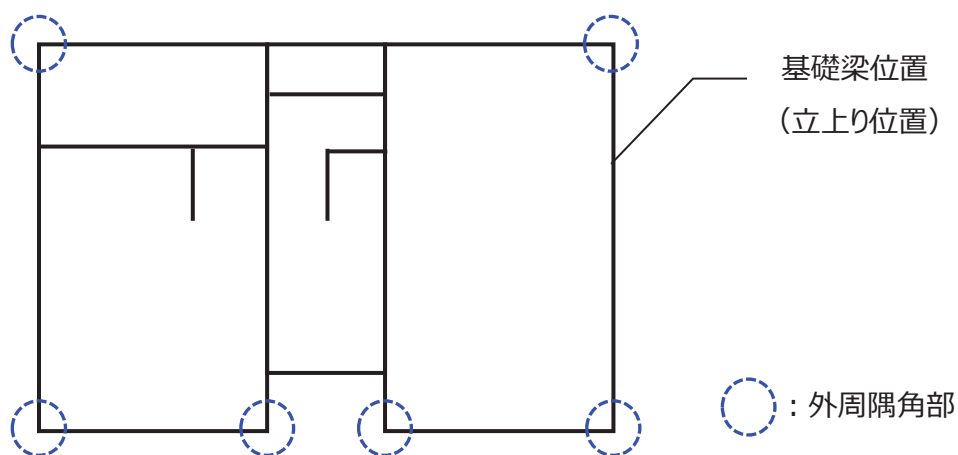
建物隅角部は「配筋表：隅角部耐力壁直下の補強筋」に準じて主筋を決定してください。

(3) 配筋表の見方

(3) -1 補強筋の検討が必要な位置

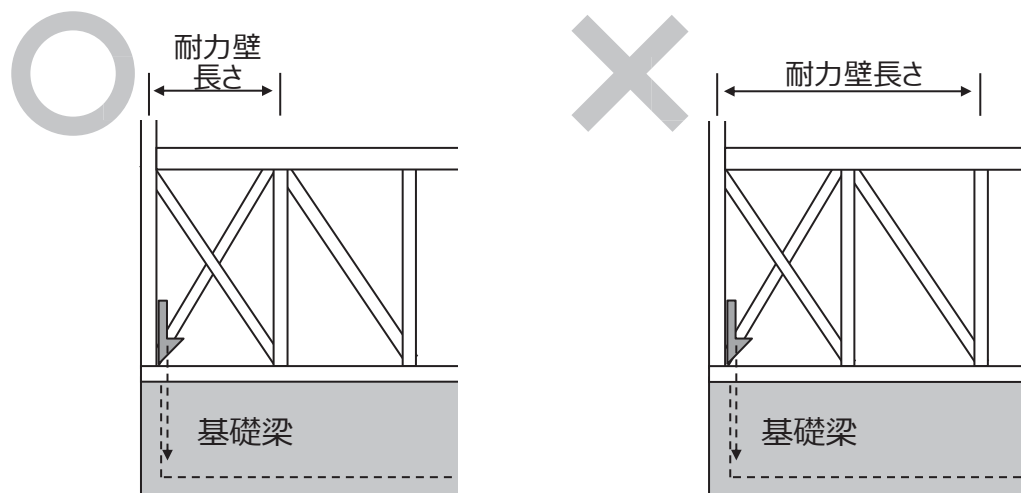
1階耐力壁端部が建物外周隅角部に接する基礎梁を対象とします。

下図の○印部分に補強筋の検討が必要となります。



(3) -2 耐力壁長さの判定方法

建物外周隅角部に耐力壁が連続する場合も、柱間を耐力壁長さとしています。

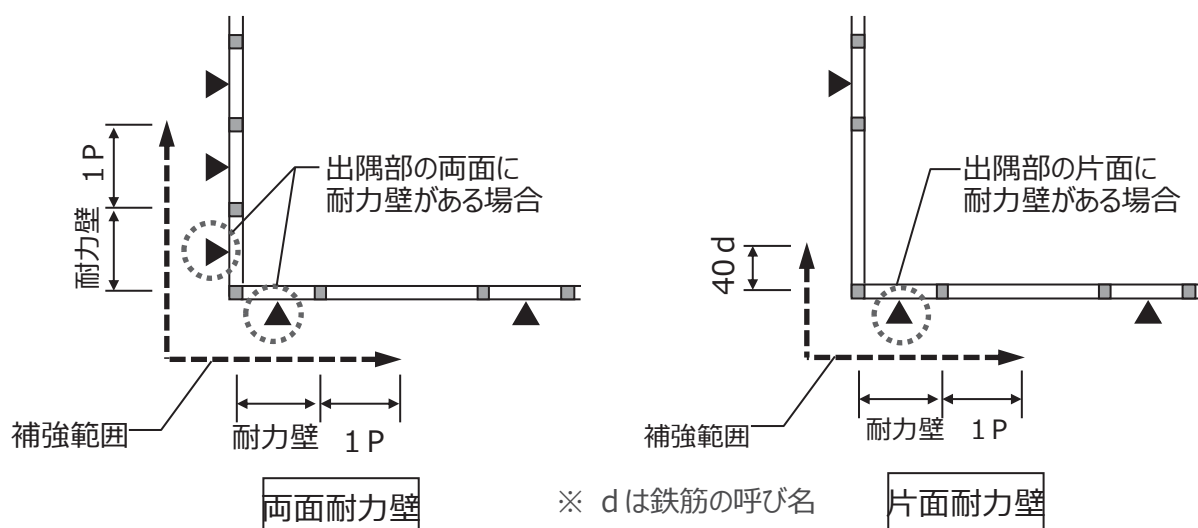


(3) -3 引抜力の判定方法

告示第1460号第二号ただし書きより N の値 を算定する。

(4) 補強方法

配筋表の補強筋が標準主筋を超える補強筋が必要となった場合は、下記の範囲の上下主筋を配筋表に従って補強する必要があります。

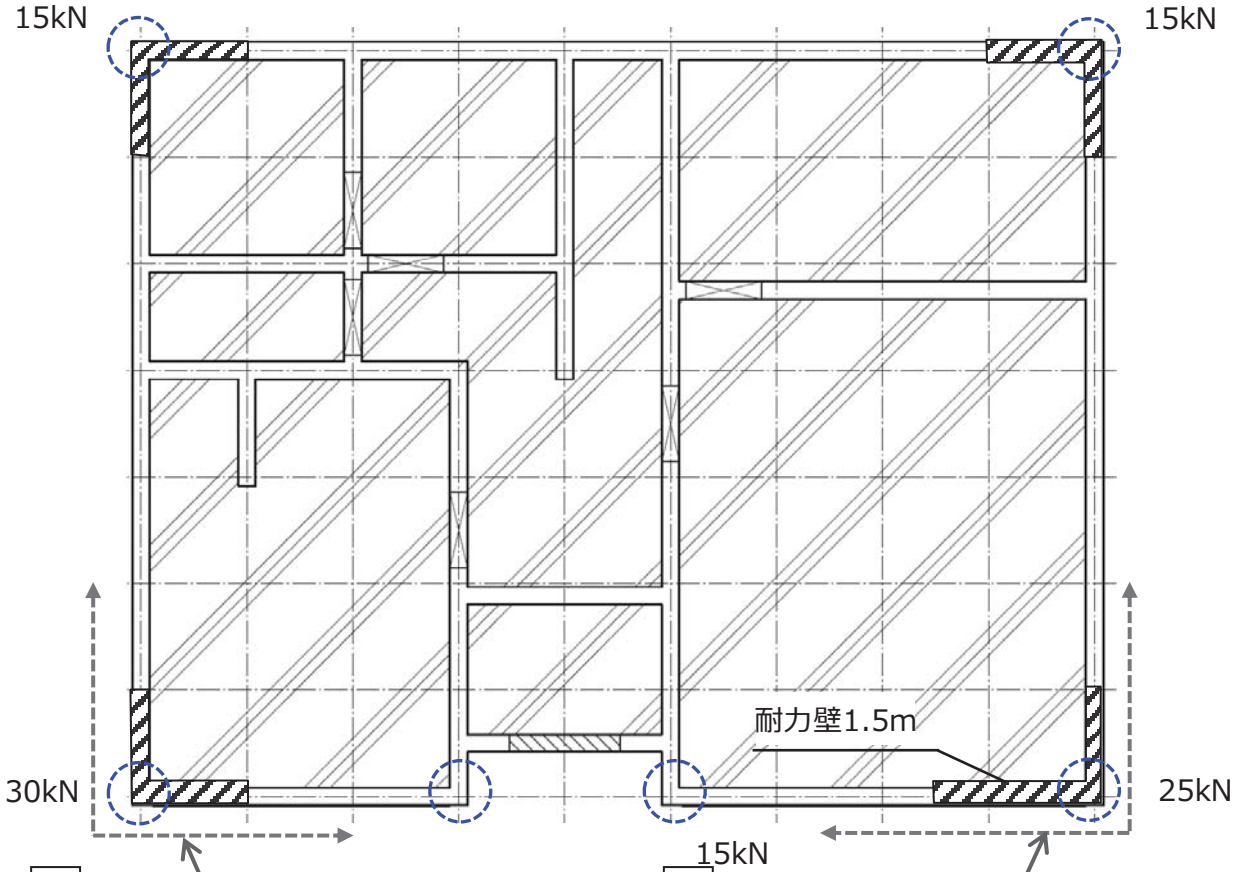


(5) 判定例

【条件】基礎梁成520

○ : 外周出隅部

▨ : 耐力壁設置箇所



1
この部分は引拔力が30kNで、
耐力壁が1mのため、上下主筋をD13+D13
から④ D13+D16に変更

2
この部分は引拔力が25kNで、
耐力壁が1.5mのため、上下主筋をD13+D13
から⑤ D16+D16に変更

配筋表：出隅部耐力壁直下の補強筋

【基礎幅150mm】

メーターモジュール

《補強筋凡例》 ① : D13 ② : D13+D10 ③ : 2-D13 ④ : D13+D16 ⑤ : 2-D16

※黒塗りつぶし箇所は配筋の適用範囲外です。

基礎梁成 (mm)	出隅部柱脚の 必要接合倍率		引拔力 (kN)	耐力壁長さ(柱間)		
				1 (m) 以下	1.5 (m) 以下	2 (m) 以下
520 以上	(は)	1以下	5.1	①	①	①
	(ニ)	1.4以下	7.5	①	①	②
	(ホ)	1.6以下	8.5	①	①	②
	(ハ)	1.8以下	10	①	②	②
	(ト)	2.8以下	15	②	③	④
	(チ)	3.7以下	20	②	④	⑤
	(リ)	4.7以下	25	③	⑤	
	(ル)	5.6以下	30	④		
	(35)	6.6以下	35	④		